

令和7年度 第3回運営協議会議事録

開催日：2026年1月26日 月曜日 14:30～15:50

於：プレゼンテーションルーム

出席者：

【委員（50音順、敬称略）】岡崎 裕、木村 京子、黒田 浩継、田中 正視、林 洋平、山岡 里帆

【事務局員】校長 松井、事務長 松原、教頭 田中、首席 宮武、首席 井戸本

【学校関係者】各分掌長、学年主任

1 連絡および報告

（1）授業アンケートの結果について（教頭）

・座学と実技の質問を分けて、全部で9問、年に2回実施。各設問ごとの値、平均値は百分の一レベルの変化で、目標値の3.2をクリア。変化がないということは入学してくる生徒が多様化している状況に対応した授業ができていると判断する。

（2）学校教育自己診断の結果（教頭）

記述式の「りんくう翔南高校をさらに良くするには」という設問をメインに報告

（生徒からの回答）

・校則が厳しすぎる、体育祭や文化祭を楽しくしてほしい、教室などの環境不良など。例年、回答が少なかったが、今年は従前よりは回答が多くあった。

（保護者からの回答）

・黒板の字が見にくい、身だしなみ指導が厳しすぎる、始業時刻を遅らせてほしい、樽井駅からの道が狭く危険、体育祭や文化祭がものたりない、特定の授業の板書の字が汚いなどの意見があった。

・それ以外に、合唱コンクールなどのイベントがあればよいとの意見や、Google フォームによる欠席連絡方法について肯定的な意見があった。

（教員からの回答）

・今年度は多くの回答があった。多様な生徒が増えているので時間がない、教員のスキルアップ研修がもっと必要では、生徒が自主的に活動する機会がもっとあった方がよいのではないかという意見があった。

（まとめ）

・生徒や保護者からの意見で、身だしなみにかかる校則を緩和してほしいという意見が昨年から増えた。教員の意見としては、「生徒はしっかり授業を聞いて理解している」という質問の評価が改善された。一方、生徒の回答で「生徒が授業を理解している」という質問の評価については悪化している部分もあった。

・ほとんどの項目で昨年度から変化はなかったが、生徒への設問「りんくう翔南高等では服装や頭髪の指導がきちんとされている」では、肯定的な回答が約30%下がっている。生徒自身も、従前に比べ身だしなみ指導について、ルールと実態に乖離があることを把握している。

(3) 令和7年度の進路決定状況について（進路指導主事）

- ・進路未決定者は昨年度に比べて増えている。
- ・進学については、大半が指定校推薦や総合型選抜での受験。
- ・公募制推薦入試で受験する生徒は数名いたが、結果については大変厳しい状況。
- ・専門学校は、ほとんどが総合型選抜による受験。
- ・看護医療は、近年、倍率が低下。3名不合格があったが、1名は別の看護専門学校を受験し合格した。
- ・就職は、求人数は増加。しかし、1次決定率は78.3%と低迷。
- ・公務員は1名自衛隊合格、1名警察現在受験中。

2 協議

<令和7年度学校経営計画の評価について（校長）>

- ・生徒指導について、特別指導案件は減少。遅刻は1人あたり10.3回と増加している。
- ・学校教育自己診断の生徒の満足度は微増しているが、目標には届かなかった。
- ・部活動について、加入率はほぼ横ばいで目標には届かなかった。

【意見および質疑】

- ・（黒田氏）遅刻が増えているとのことであったが、欠席はどうか。
- ・（生徒指導主事）まだデータを集約していない、欠席も増えていると感じる。同じ生徒が欠席遅刻を繰り返しているケースが多い。
- ・（岡崎氏）トイレ退室が増加しているとのことだが、授業から抜けさせないようなクオリティにする、飽きさせないようにする等の工夫が必要なのではないか。

また、部活動の加入率について、アルバイトは経済的な活動で、逆にクラブ活動をする場合は出費があり、生徒・保護者の経済状況を把握することも重要ではないか。

<令和8年度学校経営計画について（校長）>

- ・海外の姉妹校との提携は、昨年12月に台湾の治平高級中学（私学）との姉妹校提携の調印を行った。府からの補助金は生徒1人あたり10万円のみのため、近い場所にある国に絞られる。英語を使って交流をするということが補助金を活用する条件で、1年生はBASE in OSAKAを導入する。
- ・ハートフルほいくコースの大学・専門学校との連携拡大を盛り込む。
- ・生徒指導提要の改定に則り、次年度より、生徒指導の方針をマナー指導に変更する予定。
- ・働き方改革は、ICT活用で業務の効率化を進める。具体的には生成AIアシスタントを使用してルーティン業務などを効率化する。

【意見および質疑】

- ・（林氏）遅刻増加について、高校生は個人の評価にしか影響がないが、社会人になった場合、同僚や会社の利益損失にも繋がる。マナー指導を行う場合の社会生活を念頭に置いた指導が必要でないか。
- ・（岡崎氏）学校教育自己診断のアンケートで、服装や頭髪指導の肯定率が下がっていることや、生

徒、保護者から頭髪などの身だしなみ指導が厳しすぎるとの意見が多くある。マナー指導に移行していくことで改善を図っていくべきだと考える。

- ・(校長) 生徒へのマナー指導への移行の説明を実施した。その直前に職員会議で、教員に対して生徒指導提要の研修を行った。教員にも方向性の説明を行い、同じ方向を向けるようにすることが重要だと考える。

(岡崎氏) 管理職の立場と、実際に生徒に接する教員では捉え方が異なる。現場の状況を鑑みて学校全体の方向性や、指導内容については教員との合意が必要と考える。

(校長) そのために試行期間を設けた。次年度に向け柔軟な対応をしていく。

- ・(田中氏) 20年ほど前、本校で教員をしていた際に進路指導部に所属していた。悪い意味でなく、進路状況や指導内容は当時と大きく変わっていない。地域性や気質は不变のものであるからと捉えている。
- ・(山岡氏) 働き方改革について、AIの活用とあったが、他校でもICTに詳しい教員が研修を行うなどをしていると聞いている。